

村上龍

走れ！
タカハシ



走れ！タカハシ

村上龍



走れ！ タカハシ

一九八六年五月二〇日 第一刷発行

著者——村上 龍

© Ryu Murakami 1986, Printed in Japan

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三—九壺—二二（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——九五〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

PART 1 おまえ、いいな巨人戦も観れるんだろ？

7

PART 2 まったく一体どうなっているんだろう？

27

PART 3 海へ行って陽焼けをしてきただけではだめで、ただ女をモノにできなかったというだけでオレだけどうしてこう差別されなければならないのだろうか？

49

PART 4 カウンターで飲んでいる時、いつも思うのだが、バーテンダーというのは何と崇高な職業なのだろう

69

PART 5 お前にはさのうがない、とコーチは言った

93

PART 6 「調書を全部何回読んでも、わからんことがある、どうしてお前はあの女を殺さなかったんだ？」

115

PART 7

新学期が始まった

135

PART 8

「あなた、なにかスポーツやってみました？」

157

PART 9

私は小説家である

177

PART 10

あれはちょうど一年半くらい前のことだった

199

PART 11

オレは十七歳だが、とても忙しい、その理由は、しっかり者だからだ

221

あとがき

244

走れ！

タカハシ

装画 高橋常政
装幀 稲葉宏爾

おまえ、
いいな巨人戦も観れるんだろ？

「おまえ、いいな巨人戦も観れるんだろ？ マキハラってゴリラみてえにでつけあって本当か？ 今度俺のカメラ貸すからよ、シノヅカとサダオカの写真撮ってきてくれよ、彼女がファンだよ、そんなもんでもあると関係がうまくいくだろ？ え？ あ、今サダオカは二軍か」

物理の補習で学校に行くと隣の席の桜井義男がそう話しかけてきた。バカ野郎試合なんか観るヒマねえよ、と僕は答えた。前の席の木村孝彦はハラタツノリのサインを貰ってきてくれと言う。後の席の狩谷雄一はエガワに生卵をぶつけてくれればテリー・ファンク・Jr.のサイン入り色紙をやってもいいと言う。木村には、そんなヒマはねえよ、と答えてソッポを向き、狩谷には返事もなかった。

女達がひとかたまりになって喋っている。ひとかたまりの中に吉村真理子がいる。両腕を机について、片足をパタパタ動かして顎を振りながら喋っている。吉村真理子の顎は細くて尖ってい

る。本当は尖った顎の女は好きじゃない。陰険な感じがする。中学生の時から四人女を好きになったがみんなふっくらした顎だった。吉村真理子のことを好きになったのは、彼女が、やらせてくれたからだ。

先々週の土曜日の夜だった。

僕と吉村真理子は同じ町に住んでいる。港北区の高台にある住宅街だ。オヤジが家を建てた頃はそうでもなかったらしいが、今ではすごく土地が高い。立派な家が多い。金持ちの街だ。吉村真理子のオヤジは作曲もやる芸能プロダクションの社長で、僕のオヤジは外資系の商社の部長だ。いくら部長だと言っても百五十坪もある土地は買えない。オフクロが仙台の医者娘で金は大部分そこから出たみたいだ。

土曜日の夜いつものことだがオヤジは書斎で鉄道模型を造っていてアニキは自分の部屋でフランス語の本を読んでいてオフクロは居間で土曜ワイド劇場を観ていた。停電でエレベーターに閉じ込められた男と女が一発やって赤ん坊ができて数年後にもう一度同じエレベーターで会ってどうのこうのというひどいストーリーだった。コマーシャルになってオフクロが振り向き「キヨシちゃんその山梨のブドウおいしいでしょ？」とかん高い声で言った。今から考えるとどうでもいいことだがその時一瞬オフクロの尖った顎に蹴りを入れてやろうかと思った。言っただろ？ 俺は今まで一万回くらい言っただろ？ ちゃんなんて言うな、キヨシちゃんなんて呼ぶなよ、ブドウはうめえよ、うめえから食ってんだよ、山梨なんて知らねえよ、知らねえの俺は何にも知らねえ人

間なの、ただうめえから食ってんだよ、文句あつか？ 黙ってろ。途中で言い過ぎてるかなあと
思ったがそういうのは止められない。オフクロは金持ちの娘の一番の欠点で苦勞を知らないから
飲んでいたビールのジョッキを壁に投げつけて、くやしい、と叫んだ。くやしい何であんたなん
かにバカにされなきゃいけないの、と泣き出した。物音を聞いてオヤジが出てきた。オヤジは恐
くない。殴らないからだ。アニキが二階から降りてくるまでに逃げなきゃならなかった。アニキ
は殴る。本気でやれば負けない自信はあるがアニキはいつも必死なのでつい気合い負けして殴ら
れてしまうのだ。どうしたんだお前どうしたんだ……オフクロの肩に手をかけて、オヤジまで泣
きそうな顔をしていた。僕は暖炉の上のキーの束をつかんで玄關に逃げた。アニキがすごい勢い
で二階から駆け降りて来て玄關のドアを開けたのと僕がオフクロのホンダタクテイのエンジン
をかけたのと同時にだった。お前がそんなだから俺は心配で行けないんだ、アニキは怒鳴った。アニ
キはフランスに行きたいのだ。大学でワインを勉強して欲しい。殴りかかってきたのでタクテ
イをスタートさせてしばらく走り止まって振り向いて、さっさと行けばいいじゃねえか、そいで
向こうの女の肉でも食って来い、と怒鳴ってやった。アニキはまた何か怒鳴ってそれはタクテイ
をふかしたので聞こえなかったのだが、隣の家の二階の窓が開いて猫を抱いたババアが顔を出し
た。スロットルを全部開けて走った。全開と言ってもタクテイだからすごくとろい。中学校の角
ででかくて黒い国産車とぶつかりそうになった。僕はすっ転んだ。アホ！ と国産車が急ブレ
キの音と共に窓から怒鳴り僕の股から離れたタクテイはギギギギギギとコンクリートを滑っ

てけやきの樹にぶつかって止まった。ケガはないかね？ と国産車は言った。ありません、大丈夫です、すみません、と僕は謝まった。君が悪いんだよ、そっちが一時停止だし、こっちは制限速度だったし……国産車も困った顔をしていた。本当に大丈夫なんです、ほら立って、歩けるし、僕が立ち上がって歩いてみせると、あ、そう、良かった、急いでるから、じゃあ、気を付けてね、国産車はそう言って去った。金持ちの街の土曜の夜はものすごく人通りが少ない。金持ちの街にはスナックも喫茶店も自動販売機もない。行きつけの店へ行こうと思って乗ってきたタクシーは動かなくなってしまった。膝から血が出ていた。そこへシェットランドシープドッグを連れた吉村真理子を通りかかったのだ。右手に小さなスコップとビニール袋を持っていた。犬のうんこの後始末用だ。

「あらあ、望月君じゃないの」

「何だ吉村か」

「何してんの？」

「タクシーでこけちまってよ」

みたいな会話で始まって、僕はワタリという名のシェットランドシープを撫でてやり、学校や友達やウインドサーフィンの話をして、本当は大学には行きたくなくてシェパードの訓練士になりたいんだなどと将来のことを話して、月がとても明るくて、そのうち吉村がひざのケガに気付いて、今うちの人は清里高原に行つててみんな留守だからうちに来て消毒してたら？ と尖っ

た顎で言ったから、別に行くところはないし、あってもタクティ動かねえから行けないし、吉村真理子の家に行って、ひざに消毒液を塗った後、やらせて貰った。僕は二回目だった。生理終わったところから中で出しているよ、と吉村真理子は言った。演歌のグループで一曲だけバカ当たりして金持ちになった吉村真理子のオヤジさんは清里高原でいたい何をしてるんだらうとイッた時考えてしまった。

「あのさ、急にこんなになったつつても、誤解しないで欲しいんだけど、あたし遊んでるわけじゃないのよ、本当はすぐくまじめなんだから」

「でもよ、吉村、血、出なかったぜ」

「望月君二人目よ」

「あ、そう、俺も吉村が二人目だ」

「言わないでね」

「何をだよ」

「あたしをモノにしたとかさ、そういうこと、言わないでよ」

「言たって誰も信じねえよ」

「あたし、言わないでって言ってんの」

そう言った時の、ブラジャーだけの吉村真理子は恐かった。顔は全然違うんだけど、雰囲気は浅野温子に似ていた。浅野温子は大好きだから、言わねえよ、と約束した。吉村真理子は髪も染

めてないし、普通の鞄と靴だし、勉強もよくできる。だが偶然会って三十八分後に一発やらせてくれた。よくわからない。それから三回ほど公園や喫茶店やオートテニスに行った。それでサザンオールスターズとカール・ルイスと浅野温子とシェパードとウインドサーフィンの話をした。キスも一回だけした。舌は入れさせてくれなかった。一発はやらせてくれない。俺のこと好きか？ と聞いたら、バカね、と言われた。よく、わからない。アニキとオヤジとオフクロは総力戦で責めてきて、タクティを弁償するために、アルバイトを始めた。きのうからだ。横浜球場のビール売りだ。桜井や木村や狩谷は何も知らない。売り子は忙しくて、ゲームなんか観てられない。サインや写真なんてとんでもない、バカ野郎、今度そんなこと言ったら殴るぜ、まったく人の気持ちも知らねえで……吉村真理子がちらっとこっちを見た。笑っている。よう、今度いつやらせてくれるんだよ？ そう大声で聞きたいのを我慢した。

きょうのカードは広島戦だ。カープはジャイアンツの次に客が入る。カープファンは下品だ。ジャイアンツファンは助平で、タイガースファンは低能で、ドラゴンズファンは無能で、スワローズファンは変態で、ホエールズファンは病気だ。プロ野球は嫌いだ。こんなスポーツは地球上から消滅すればいいと思う。そんな風に思いついたのはアルバイトを始めてからだ。アルバイトするのは初めてだ。後悔している。夜間高校生が四人いるがあいつらはすごい。ジャイアンツ戦の時なんか、四回も五回も売り切る。階段を駆け上がってお客さんのところへ行く。そして明る

い。僕はだめだ。おいこの野郎観えねえぞバカ、なんて言われるだけで僕はムカッとくる。そして疲れてしまう。アニキに、弁償すりゃいいんだろ、なんて言わなきゃ良かったと思ってしまふ。千円札を指に挟むのも難しいし、泡がこぼれないようにビールをコップに注ぐのも難しい。受け持ちはネット裏の指定席だ。ホエールズファンとカープファンで六対四くらいの割合でど圧倒的にカープファンが元気がいい。さっきビールを買ってくれたアベックは典型的なホエールズタイプだ。アベックのすぐ上に威勢のいいカープファンのおじさんがいる。野次がうまい。若いカナザワが投げてて連打されると、替えてやれ替えてやれシャワー浴びさせてやれ寝せてやれ帰してやれ親元に帰してやれTVKでやってっから親も観てるぞかわいそうじゃねえかせ・キ・ネ！ 帰してやれ！ などと叫ぶ。ホエールズファンのアベックはグッとくちびるを噛んで耐えている。男の方が時々、ちくしょう、とか、負けないぞ、とか、殺してやるとか呟く。女はじつと男の手を握って、そうよ、とか、ひどい、とか、だいじょうぶ、と言う。

誰かが僕を呼んだ。

ネット裏の真ん前の小柄な男だった。派手なチェックのスーツを着てパーマをかけて片足を隣の席に横柄に上げた男は、残ってるビール全部買うから坐れ、と言った。四脚ある指定席には男と厚化粧のサングラスの女の二人だけが坐っている。指定席にはスカイミュージックと名前が入って、俺は吉村だ、と男はビール十三本の金を払ってから僕に言った。お前も仕事だから時間もないだろう、ゆっくりビールを注ぐ間俺の話を聞け、ゆっくりビール注げよ……三本目のビー